

自閉スペクトラム症（ASD）児におけるアタッチメント研究の概観

—特性と関係性の視点からアタッチメントの特質を捉える—

教育心理学コース 堤 かおり
発達保育実践政策学センター 高 橋 翠

Attachment in Children with Autism Spectrum Disorders
-Current Research Review of Its Quality and Specificity-

Kaori TSUTSUMI
Midori TAKAHASHI

This paper aims to review the literature on attachment in children with Autism Spectrum Disorder (ASD), highlighting risk and protective factors in the development of attachment. Research to date concluded that although children with ASD display less attachment security than those without ASD, they can form secure attachment. The severity of both autism symptoms and developmental delay is consistently identified as a risk factor for insecure attachment; however the extent to which each of these factors impact attachment quality is yet to be revealed. Studies identified that parents of children with ASD are equally sensitive as those of children without ASD, but parental sensitivity does not always predict attachment security of children with ASD, because there are some latent problems on reciprocal interaction. Conventional frameworks and procedures for understanding attachment in research on typically developing children cannot necessarily capture the underlying challenges to the attachment system faced by children with ASD. Further work that relies on the primary meaning of Bowlby's attachment theory is needed to identify formation process and the function of attachment in children with ASD.

目 次

- 1 自閉スペクトラム症（ASD）児のアタッチメントを研究することの意義
- 2 ASD児はアタッチメント形成可能か
- 3 ASD児は安定型アタッチメント形成可能か
(ア) ASD児の安定型アタッチメント形成割合
(イ) 知的発達、ASDの特性と安定型アタッチメント
- 4 ASD児のアタッチメント形成におけるリスク因子
(ア) 子ども側の要因
(ウ) 相互作用の要因
(エ) ASD児の認知機能とEA
- 5 ASD児のアタッチメント研究における限界と課題
(ア) SSPでは捉え切れないASD児のアタッチメント行動
(イ) ASD児のアタッチメントの特異性—アタッチメントの機能に基づく考察—
- 6 まとめと今後の展望
- 7 引用文献

1 自閉スペクトラム症（ASD）児のアタッチメントを研究することの意義

アタッチメントとは、不安喚起時のネガティブ感情を、特定他者への近接を通して調整しようとする欲求および行動の傾向のことであり、元来ヒトに生得的に備わった行動制御システムである（Bowlby, 1969）。それは、外界からのストレスと内界の神経生理学的機構との間に存在する“緩衝帯”の役割を果たし、ストレス対処や情動制御を行うメカニズムの両方の形成に作用することを通して、個体のその後の心身発達を左右するという（遠藤, 2005）。定型発達児におけるアタッチメントは、人の顔や声などの社会的刺激へ選択的に反応する傾性と、それに対して適切に応じようとする大人の養護性、そして両者の相互作用を基盤として形成すると考えられている（遠藤, 2005）。

自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder: ASD）は、DSM-5（APA, 2015）において「社会的コミュニケーション、対人相互反応における持続的で頻回な

問題」をその主症状の一つとする神経発達障害とされている。歴史的には、1943年にKannerがアタッチメントの欠如によって特徴づけられる障害であると発表したことに始まる。彼は、ASD（当時はAutism）児について、「養育者とその他の人を区別しない」ことや、「一人でいるときが一番幸せそうにしている」といった内容を報告している（Kanner, 1943）。また、後にBettelheim（1967）もASDはアタッチメント不全の障害であると発表し、DSM-III（APA, 1980）やDSM-III-R（APA, 1987）に至るまで、「アタッチメント形成不全」が診断基準に盛り込まれていた。こうした経緯の中、ASD児はアタッチメントを形成し得ないとする考えが暗黙裡となっていた。

しかし、1980年代になって行われたASD児のアタッチメント研究の結果は、ASD児におけるアタッチメント形成不全という暗黙の前提を完全に覆すものであった。ASD児においてもアタッチメント行動が一貫して確認されたのである（Sigman & Ungerer, 1984）（詳細は後述）。Kanner（1943）の記述のように、まるでアタッチメントを形成し得ないかのように振る舞うASD児のアタッチメントとは一体どのようなものなのか。「社会的コミュニケーション、対人相互反応における持続的で頻回な問題」は、アタッチメント形成の基盤となる親子の相互作用に影響を与えるのではないか。ASD児のアタッチメントは、定型発達児と同様の形成プロセスを踏むのか。アタッチメントの質は同様なのか。現実場面におけるASD児の状態像と研究結果の溝を埋めるべく、その後、ASD児のアタッチメントについて多くの研究がなされてきた（Sigman & Mundy, 1989; Rogers et al., 1993）。

以下、本稿では、ASD児のアタッチメントに関する先行研究を概観し、これまでに明らかにされてきたことと、今後の課題、展望について論ずる。

2 ASD児はアタッチメント形成可能か

本稿の冒頭で述べた定義を少し平たく言い換えると、アタッチメントとは、子どもが何らかの不安な状況に晒されたときに、特定他者に近接し、その他者との二者間の関係を通して感情の崩れを立て直し、安全の感覚を得ることである。こうして安全の感覚を得ることができた子どもは、特定他者を新たな探索活動を行うための安全基地として利用することができる（遠藤, 2018）。このようなアタッチメント行動を、ある一定の手続きによる実験的な状況下において生起さ

せ、子どものアタッチメントのタイプを測定する方法に、SSP（Strange Situation Procedure: ストレンジシチュエーション法）がある（Ainsworth et al., 1978）。SSPにおいて子どもは、初めて来た場所である実験室においてストレンジャーと対面し養育者と少しの間分離するというマイルドなストレスに晒される。このように実験的に設定された不安喚起場面における子どもの行動、また、養育者との再会場面における子どもの行動は、家庭で観察されたアタッチメントの質を概ね反映しており、アタッチメントの質の個人差を捉えることができるかとされている。

定型発達児においては、アタッチメントは大きく「安定型」と「不安定型」に分類される。「不安定型」は、アタッチメント行動ははっきりと見られるものの、養育者に対する情動表出や情動調整が不安定な「回避型」、「アンビヴァレント型」を含む。SSPを用いた多くの研究によって、それぞれのタイプが、どのような養育態度を呈する養育者との関係性の帰結として生じたのか、その形成メカニズムが論じられてきた（遠藤, 田中, 2005）。「安定型」の子どもは養育者は、子どもの内的な状況の変化に敏感で、一貫して適切な応答をしている。したがって安定型の子どもは、養育者との信頼関係のもと、不安喚起時に泣いて養育者に近接し、養育者との関係において容易になだめられ、養育者を安全基地として新たな探索活動を行うことができるとされる。一方、アタッチメントが不安定な子どもの養育者は、子どものアタッチメントシグナルに拒否的な応答や一貫性のない気まぐれな応答をする傾向がある場合や、養育者自身が精神的に不安定な場合が多いという。したがって、その子どもたちは養育者が自分の不安を受け止めてくれるという確固たる信頼感を持って養育者に近接することができず、養育者との関係において容易に安全の感覚を得られないと考えられている。

ASDのアタッチメント研究においては、ASD児は障害特性上、日常のルーティンの崩れにうまく対処できないことや、ASD児にとって予期せぬ母子分離が甚大な苦痛となる可能性があることを考慮し、研究参加児に過度の負担をかけないよう分離時間を短くするなど部分的に修正されたSSPが用いられることが多かったが（Rutgers et al., 2004）、基本的なパラダイムに違いはない。修正版SSPを用いて行われたいくつかの研究によって一貫して明らかにされたことは、ASDの状態像からの予想に反して、「ASD児は養育者に対するアタッチメント行動を呈する」ということで

あった。例えば、Sigman & Mundy (1989) は、ほとんどの ASD 児がストレンジャーより養育者に対して多くの社会的行動を示したことを報告している。また、Rogers ら (1993) の研究においても同様に、アタッチメント行動を示さない ASD 児は一人もいなかった。ASD 群、ダウン症群、非臨床群を対象とした Dissanayake ら (1996) の研究においてもやはり、養育者にアタッチメント行動を示さない ASD 児はおらず、ASD 群のアタッチメントは機能的に非臨床群のそれと同様であると考察されている。つまり、ASD 児も定型発達児と同様に、不安喚起時において養育者との関係において崩れた情動を調整しようという行動傾向を持つということが明らかとなった。

3 ASD 児は安定型アタッチメント形成可能か

(ア) ASD 児の安定型アタッチメント形成割合

ASD 児のアタッチメント形成が可能であることが明らかになると、続いて、定型発達児と同様に ASD 児も安定型アタッチメントを形成することが可能なのか、という問いに対する答えを明らかにするべく、多くの研究が行われてきた (Capps et al., 1994; Dissanayake & Crossley, 1996)。Van IJzendoorn ら (1992) によると、定型発達児においては約 65% が安定型に分類される。これに対し、ASD 児の場合は、40% (Capps et al., 1994) ~ 63% (Willemsen-Swinkels et al., 2000) と幅があり、概ね定型発達児における割合と差がないか、やや低めの水準であるものの、相当数の ASD 児が安定型アタッチメントを形成し得るという結果が報告された。しかしその後、定型発達児との比較においてはその割合に差があることも明らかになった。Rutgers ら (2004) は 10 の先行研究についてメタ分析を行い、ASD 児の安定型アタッチメント形成割合は非 ASD 児の安定型割合より低く、その差は統計的に有意であることを示している。

(イ) 知的発達、ASD の特性と安定型アタッチメント

ASD は近年スペクトラムの概念で捉えられているように、精神発達の程度と ASD 傾向の強さの組み合わせは様々である。Rutgers ら (2004) のメタ分析に引用された先行研究の対象児の中には、当時の診断基準である AD (自閉性障害) の子どもと PDD-NOS (特定不能の広汎性発達障害) の子どもが混在していた。DSM-IV-TR (APA, 2000) によると、RPDD-NOS は自閉症に類似する症状があるものの自閉症の診断

基準を満たさない。つまり、自閉的傾向は AD の方が PDD-NOS より明らかなである。また、AD 児の多く (約 75%) は知的障害を伴っている。

ASD 児の安定型アタッチメント形成割合が非 ASD 児のそれより低いのは、ASD の特性が形成に影響を及ぼすからなのか、また知的障害が形成を阻害するからなのかを明らかにするためには、知的発達レベルや自閉的傾向の強さと安定性の相関を調べる必要があった。

Rutgers ら (2004) は、6 つの先行研究についての対象児の知的発達年齢に着目したメタ分析において、安定型アタッチメント形成割合の低さは、ASD 児の知的発達遅滞の程度が大きいほど定型発達児との差が大きいことを明らかにした。つまり、知的発達遅滞は ASD 児のアタッチメント形成においてリスク要因として作用する可能性が示された。

さらに、Rutgers ら (2007) は、知的障害の程度と ASD 傾向の大きさが様々な組み合わせの児について比較を行い、知的障害を伴う ASD 児は ASD を伴わない知的障害児より安定型形成割合が低い、知的障害を伴わない ASD 児は ASD を伴わない LD (言語障害) 児より安定型形成割合が低いという結果を得た。つまり、この結果は、ASD 傾向は安定型アタッチメント形成のリスク要因となる可能性を示唆している。

ASD 児の安定型アタッチメント形成において、知的発達遅滞と ASD 傾向のどちらがより大きな影響を及ぼすかについては、さらなる研究が求められるが、知的発達遅滞の程度とアタッチメント安定性との関連は、ダウン症などの知的発達障害児には見られない ASD 児のみに見られる特徴である (Rutgers, 2004)。ASD においては、知的発達遅滞の程度が大きいほど定型発達児と比べて安定型アタッチメント形成割合の差が大きく、知的発達遅滞の程度が小さくなるほどその差は小さい。ダウン症などの知的障害児の場合にも、障害の程度に応じて安定型アタッチメント形成の遅れが見られるが、アタッチメントの質や形成プロセスに関しては定型発達児と大きな違いがないことが明らかにされている (別府, 2007)。図 1 は、上述の先行研究に基づくアタッチメントの安定性 (アタッチメントの質) と ASD、知的発達遅滞との関連についての模式図である。

Dissanayake ら (2001) は安定型アタッチメント形成において“ASD 児は補償的な認知方略を用いている”という仮説を立てている。また、Hobson (1993) も同様に、ASD 児は“情動に関連しない”知覚的な方

略を使って“情動に関連する”問題を解決している可能性を示唆している。ASD児は知覚刺激をシステムティックに部分処理する能力が優れており、反対に随伴性の理解だけでは捉えにくい社会刺激への傾性に関するリスク因子を持っていることが知られている（これについては次節で詳しく考察する）。このことから、別府（2007）が指摘しているように、ASD児は自分の行動に随伴して生起する養育者の応答行動を一つ一つ記憶し処理することによって二者間の経験を理解している可能性が考えられる。したがって、二者間の情動経験を理解するために、定型発達児と比較してより高い認知能力が必要となることが推測され、Dissanayakeら（2001）の仮説のように、アタッチメント形成に特異性をもたらしている可能性が考えられる。

4 ASD児のアタッチメント形成におけるリスク因子

(ア) 子ども側の要因

前述のとおり、定型発達児におけるアタッチメントは、人の顔や声などの社会的刺激へ選択的に反応する傾性と、それに対して適切に応じようとする大人の養護性、そして両者の相互作用を基盤として形成すると考えられている（遠藤，2005）。こうした基盤のうち、子ども側の要因である人への傾性に関して、ASDはいかなる特徴を有するのか。

通常、乳児は生得的に、人物を独特な全体的な形態として体験する能力を持っている（Stern, 1985）。例

えば、乳児は生後すぐに顔を認識する能力があり、顔を認識するときには、脳の中の顔に特化した部位が活性化するという（山口，仲渡，2009）。一方、ASD児においては、顔を認識するときであっても物を認識するときであっても物体識別に関与する脳の部位が活性化することが知られている（山口，仲渡，2009）。

また、乳児は生後すぐの段階から、母親から受けるあらゆる刺激（姿，声，肌触りなど）がどれも母親に属するものであることがわかるという（Stern, 1985）。つまり、知覚したものをそれぞれ別個に体験するのではなく、すでに乳児の段階において複数の知覚を統合し、ある属性（ここでは母親）として全体的に捉えることができる。一方、ASD児においては、全体よりも部分を指向するバイアスが生得的に存在し、それが神経発達を非定型な方向へと導く可能性が示唆されている（片桐，2014）。また、自らが自閉症者であるWilliams（2009）によると、ASD者は人の存在を「感覚的印象の集合体」として、例えば、「この手元」「あの口の動き」というように個々別々に知覚する傾向があるという。このような優れた部分処理能力は、全体の感情を読み取る手がかりを損なうことにつながる可能性が示唆されており（片桐，2014）、このことは、神経生理学的知見から、表情認知や顔認知において、ASD児は非定型な事象関連電位（ERP）を示し、顔の違いや表情の違いを区別する能力低下の可能性を示唆する結果とも一致する（Dawson, 2008）。

これらの知見は、Baron-Cohen（2003）が主張する、

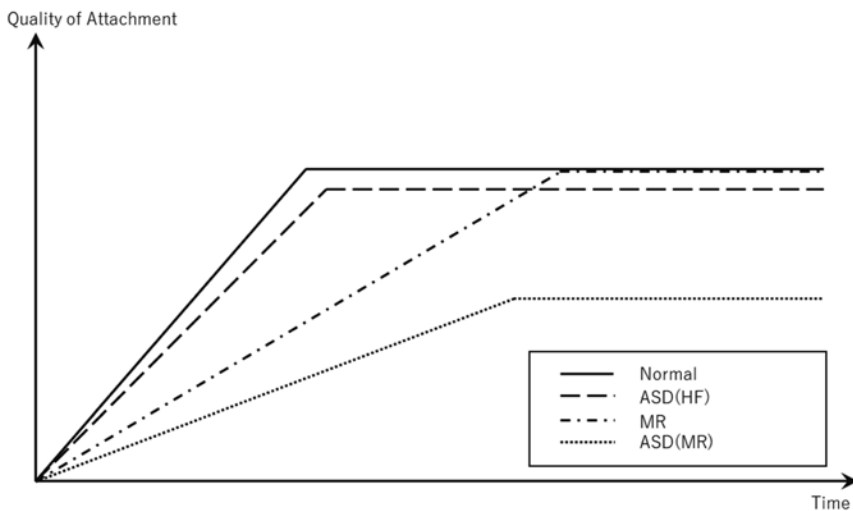


図 1 知的発達遅滞の程度と安定型アタッチメント形成割合の関係

(Normal : 定型発達児, ASD (HF) : 高機能ASD児, MR : 知的発達障害児, ASD (MR) : 知的発達障害を伴うASD児)

ASD児においては生物学的基盤に発する二つの特性のうち、ものごとのパターンや規則を探ろうとする傾向である「システム化」が強く、他人を理解しそれに対して適切な感情を催す傾向である「共感性」が弱いとする理論とも一致する。また、ASD児が人を全体として捉える傾性が弱いことに関連して、Dawson (2008) は、神経生理学や脳科学、行動科学の知見を総合し、彼らの中核的な問題は、社会的刺激に対する傾性が低く社会的刺激に情動的なタグ付けを行わないことだと仮定している（The social motivation hypothesis）。実際、ASD当事者の手記（Williams, 2009）からは、彼らが視覚刺激や聴覚刺激に没頭し社会的な意味付けを行おうとする傾向が極めて低い様子が詳細に記されている。

要するに、非ASD児はアタッチメント形成の素地となる人への傾性を生得的に持ち合わせているのに対し、ASD児はそもそも、そうした能力がきわめて低い可能性が大きい。但し、Baron-Cohen (2003) が主張する「システム化」の特性の強さは、生物学的基盤の上に環境によって行動的表現型を賦与されることによって現れるものと想定されている。同様に、Dawson (2008) は、ASD児は社会的なリスク因子を有するものの、行動的表現型は周囲の相互作用の在り方に依存し、適切な介入がなされた場合には適応的な発達につながり得ると指摘している。つまり、ASD児のアタッチメント形成において子ども側のリスク因子は確かに存在するものの、子どもを取り巻く環境によってその影響は肯定的に変わり得ることをここに付言する。

（イ）養育者側の要因

アタッチメントの質を左右する要因は子ども側の行動や認知に関する特徴のみでは限らない。先に述べたとおり、アタッチメントは通常、特定他者との情緒的な交流を積み重ねる中で形成されていく。したがって、子どもが近接する対象となる養育者の対応も当然アタッチメント形成の一要因となる。Bowlby (1969) は、養育者の感性性はアタッチメントの質に影響すると仮定し、後に、一般的な子どもについては、Ainsworth (1978) によって、養育者の感性性と子どものアタッチメントの安定性には相関があることが実証的に示された。ASD児の場合にも同じことが言えるとするれば、子ども側の特徴だけではなく、養育者の感性性の高低がアタッチメントの質に影響している可能性も考えられる。

Van IJzendoornら (2007) は、ASD児、知的発達障害児、言語発達遅滞児、定型発達児を対象とし、養育者の感性性についての調査を行った。その結果、ASD児の養育者の感性性は、非ASD児の養育者のそれと有意差がないことが明らかにされた。また、Gulら (2016) は、ASD群、知的発達障害群、精神病群を対象とした比較を行い、ASD児の養育者は十分に高い感性性を備えていることを明らかにした。つまり、ASD児の養育者は、安定型アタッチメントのリソースとなり得る感性性を十分に持っているということが言える。

しかし、それにもかかわらず、ASD児の養育者の十分高い感性性は、必ずしも子どものアタッチメント安定性を予測しないことも明らかにされてきた。Van IJzendoornら (2007) や Baker (2010) は、平均年齢が2歳前後の子どもを対象とした研究において、非ASD児の場合は、養育者の感性性は子どものアタッチメント安定性を予測するのにに対し、ASD児の場合には同様の相関が見られないことを明らかにした。一方、平均年齢が5歳前後の子どもを対象としたKoren-Karie (2009) や Rozgaら (2018) の研究においては、ASD児の場合であっても非ASD児の場合と同様に、養育者の感性性とアタッチメントの安定性に相関関係があるという結果が見出された。Van IJzendoornら (2007) の報告のように、養育者の感性性が必ずしもアタッチメントの安定性につながらない原因については次節において関係性の観点から考察する。

（ウ）相互作用の要因

アタッチメントは本来、子どもの養育者に近接しようとする傾向や、それに対する養育者側の応答性を重視しつつも、両者の相互作用の帰結として築かれる関係性に着目して捉えるべき概念である（遠藤, 2018）。Biringen (2008) は、アタッチメント理論を基に、より包括的な二者間の関係の質に着目した情緒的利用可能性（Emotional Availability: EA）という概念を提唱した。これは、養育者の子どもに対するEAと、子どもの養育者に対するEAの両方を含み、アタッチメント形成過程の両者の関係の質を評価することができることとされており、近年、注目が集まっている（Biringen, et al., 2014）。EAには養育者側の要因として、感性性（sensitivity）に加え、養育者が子どものやりとりに秩序をもたらす支持的に接すること（構造化: structuring）、養育者が必要以上に子どもの主体性を侵さないこと（非侵入性: non-intrusiveness）、養育者が子ども

に対して敵意的な態度をとらないこと（非敵意性：non-hostility）が含まれる。また、子ども側の要因としては、子どもが養育者に対して応答的であるかどうか（応答性：responsiveness to the adult）、子どもが主体的に養育者を引き込むか（巻き込み：involvement of the adult）が含まれる。つまり、EA という概念においては、アタッチメント形成に影響を与える要因として、養育者側に関しては感性のみではなく他のスキルも考慮し、子どもの側に関しては二者間の関係の質に寄与する最低限の社会的な傾性が考慮されている。

養育者と子どもの関係について、Dolevら（2009）は、子どものASD傾向が大きいほど、子どもの「応答性」「巻き込み」が低く、養育者の「構造化」「非侵入性」も低いことを見出した。これについてDolevは、ASD児においては遊びの題材が特異的で、遊びのレベルは実年齢から期待されるより低いことが多いため、養育者がASD児に対するEAを維持し続けることはとても難しい可能性があることを考察している。また、「応答性」や「巻き込み」が低い子どもは、養育者の過度に指導的な対応を引き出す可能性があることを指摘している。EAを提唱したBiringen（2008）は、元来、子どもからの養育者に対するEAは養育者へのフィードバックシステムとしての機能を備え、養育者にとっての報酬になると述べている。本来は十分に高いEAを備えている養育者でも、EAの低い子どもとの相互作用の帰結として、EAが部分的に低くなってしまふことを見出したDolevら（2009）の研究結果は、Biringen（2008）のフィードバックシステムに関する理論を実証的に示しているといえる。また、このことは、前節で触れたVan IJzendoornら（2007）やBaker（2010）の、養育者の感性が必ずしも子どものアタッチメント安定性と相関しない一つの要因となっていると考えられる。

また、Oppenheimら（2009）は、アタッチメント形成における、養育者が子どもの障害を理解し受容することの重要性を示し、その上で、養育者の感性に洞察性（子どもの行動の背景にある内的プロセスに配慮する傾向）が加わることが、子どものアタッチメント安定性を予測するとしている（Oppenheim et al., 2012）。

ASD児の多くは、非ASD児には不快と感じられない特定の音や感触を嫌うというような、感覚過敏を持ち合わせていることが知られている（岩永，2013）。そのため、養育者の思いもよらない場面でASD児が恐怖を感じる可能性も多分にあることが推測される。

また、感覚過敏や認知特性に起因する癩癩（かんしゃく）や自傷、常同行動といった問題が生起することも少なくない。養育者がこうした問題がなぜ生起するのかその理由が理解できず、適切な対応に困難を伴う場合は、児に生起したネガティブ情動が適切に調整されないだけでなく、養育者自身の子育てへの自信喪失や無力感につながる（柳沢，2012）。つまり、養育者が本来高い感性を備えていたとしても、特性の理解がなされていない場合には、それがアタッチメント形成においてうまく機能しない状況に陥る危険性を孕んでいる。一方、ASDの認知特性に配慮して環境を構造化し、特性に寄り添った形でコミュニケーションを行うことは、彼らを取り巻く事象に関するASD児自身の理解を促し、安心をもたらす。そして次第に二者の関係性にポジティブな変化が生じるという（高橋，2003）。このことから、ASD児のアタッチメント形成においては、特性から生じる彼らの行動の背景にある意味を考慮した養育者の対応、つまり洞察性と特性に応じたEAの発揮が重要であることが伺える。

（エ）ASD児の適応機能とEA

先に述べたように、ASD児のアタッチメント形成には認知発達に関連していることが知られているが、これはEAに関する研究知見からも説明され得る。

Johnら（2012）は、様々なタイプの発達障害児を対象とした研究において、母のEAの高さは子どものアタッチメントの安定性を予測し、また、子どもの適応機能の高さも子どものアタッチメント安定性を予測するが、それらは、子のEAの高さを媒介したときのみ当てはまることを明らかにしている。なお、Johnらの研究における適応機能とはVineland TM-II適応行動尺度（Vineland II; Sparrow et al. 2005）で測定されたもので、コミュニケーション、日常生活、社会参加、運動能力の4つの領域を含んでいる。言い換えると、十分に高い感性を備えた養育者のもとで、子どもの適応機能がある程度高いという条件と、子どものEAがある程度高いという条件が揃うことがASD児における安定型アタッチメント形成に重要である可能性を示唆している。

ここで、（イ）で触れた二つのタイプの研究結果について、2歳前後と5歳前後の子どもでは、一般的には5歳前後の子どもの適応機能の方が高い。Johnら（2012）のモデルに照らすと、同じく感性が高い養育者を持つ条件下で、非ASD児においては2歳前後の適応機能があれば安定したアタッチメントを形成

し得る。また、この時点で十分なEAも持ち合わせているということになるだろう。これに対し、ASD児の場合、2歳前後の時点においては安定型形成割合は低く、5歳前後になってその割合が上がる。つまり、ASD児の場合定型発達児より時期が遅れるものの、5歳前後には、安定型形成に必要な適応機能EAを備える子どもが多くなるのではないかと推察される。

5 ASD児のアタッチメント研究における限界と課題

(ア) SSPでは捉え切れないASD児のアタッチメント行動

SSPは通常12~21か月の子どもを対象として用いられるアタッチメント測定法である。にも関わらず、ASDの研究においてはもっぱら、これより年上の子どもたちを対象としてきた (Capps et al., 1994; Rogers et al., 1991; Dissanayake & Crossley; 1996)。その背景には、対象児に対して過度の負担をかけないようにするなどの倫理的な配慮 (Rutgers et al., 2004) や、確定診断が下りる時期がSSPの対象年齢より上であることが多いという問題もあると思われるが、1歳台のASD児を対象とした研究はほとんどないため、厳密にはSSPを用いたASDのアタッチメント研究結果のみで、定型発達児やその他の障害児との比較を行うことはできない。

Rutgersら (2007) は、ASD児のアタッチメントに関して、SSPによる結果と質問紙による結果に相違があることから、彼らのアタッチメント行動は、非ASD児より文脈依存的である可能性を示唆している。また、伊藤 (2002) も同様に、家庭ではアタッチメント行動を示していながら、SSP場面においては全くアタッチメント行動を示さない子どもの存在を明らかにした。加えて、遊具やコンセントなどの環境物に注意が向いていると、SSP場面における母親やストレンジャーの入退室に全く気付かないASD児が多くいたことを報告している。これらの結果から伊藤は、SSPにおいてアタッチメント行動を示さなかったASD児がアタッチメント未形成であると結論することはできず、SSPにおけるASD児のアタッチメント行動の欠如はASD児に特異的な認知特性に起因するものであり、SSPのみではASD児のアタッチメントを正確に測定することは困難であると考察している。

SSPでは、ある程度条件を統制した実験観察において、アタッチメント行動が生起すると考えられる場面 (新規場面において母親の不在時にストレンジャー

と対峙する) を便宜的に設定し、その場面におけるアタッチメント行動について評定を行う (Ainsworth et al., 1978)。このようにSSPによって観察される場面は限定された場面であるが、定型発達児の場合は、SSPにおけるあるパターンの行動が、実際の生活場面での母子関係の質を反映している。しかし、ASD児の場合は、人に対する注意の向け方の特異性 (Hobson, 1993) や、感覚の偏り (岩永, 2013) から、彼らにとって、研究者があらかじめ設定したストレスサーが、定型発達児と同様にストレスサーになるとは限らないし、研究者が想定しない事象に子どもが恐怖を感じる可能性も考えられる。また、ASD児者は感覚過敏等から人への近接の仕方にも特異性があることが知られており (Williams, 2009)、不安喚起時における養育者に対する見た目の行動について、必ずしも定型発達児の場合と同様に捉えることはできないかもしれない。Hobson (1993) はSSPのASD児への適用について、場面を限定した観察からその一般的な意味を評定するのは難しいと、その限界を述べている。

(イ) ASD児のアタッチメントの特異性—アタッチメントの機能に基づく考察—

Bowlby (1969) は元来アタッチメント理論において、子どもが不安喚起時に近接し、二者間で情動の崩れを立て直す対象としての養育者を「安全な避難所 (safe haven)」と、また、情動の崩れを立て直した後、安心して探索に出るための拠点として養育者を利用することを「安全基地 (secure base)」とし、それらの機能を重要視している。安全基地として機能しているアタッチメントは発達促進的であり、子どもは必ずしも近接し続けなくとも養育者を支えとして新たな活動に挑戦することができる。

これまで述べてきたように、主にSSPを用いた多くの実証研究によって、ASD児は特定他者に対してアタッチメント行動を示すことが明らかにされてきた。しかし、自然場面におけるその本質的な機能については、必ずしもBowlbyがいう本来のアタッチメント機能と同様ではないことを示唆する結果も報告されている。Keenanら (2016) は、養育者に対するインタビュー調査から、新奇な場面において養育者に過度に近接し続け、探索の機会を得ることができていないASD児が一定割合存在することを明らかにした。つまり、実際の生活場面において、ASD児は養育者を一種の「安全な避難所」として利用していても、必ずしも「安全基地」としては利用していない可能性が示されたので

ある。これは、ASD児が養育者を心的支えとして求める「心理的安全基地」としてではなく、要求充足のための「道具的安全基地」として利用しており、アタッチメントの質は定型発達児や他の障害児とは異なっていると伊藤（2002）のモデルとも通ずる。

一方、少数ではあるが、養育者以外の大人の丁寧で思慮深い介入により、ASD児が養育者を「安全基地」として心理的に頼るようになった事例についての詳細な報告もみられる（別府，1994）。こうした事例から、別府（2007）は、ASD児が自分の情動を不快から快へコントロールしてくれる他者存在に気づく過程には、自分に快の情動を引き起こす行動や場面を、多くのアタッチメント対象と多くの行動・場面で持つことが必要だと述べている。前述のように、生得的に人に特別な関心を向け、養育者との情動共有を自然に経験することができる子どもたちとは違って、ASD児は、人への傾性が低く、物事を多くの部分の集合として捉える傾向がある。このことから、ASD児の場合、情動経験についても、部分（情動と場面の随伴性を多くの対象と、多くの場面で持つこと）の積み重ねの中でようやく他者存在が場面から浮き上がってくるとする別府（2007）の仮説は考察に値する。しかし、ASD児が「安全基地」として養育者を頼るようになる過程についての報告は、現在のところごく少数の事例にとどまっており、更なる研究が求められる。

6 まとめと今後の展望

ここまで、ASD児のアタッチメントに関する先行研究を概観してきた。その中で、ASD児もアタッチメント形成が可能であること、安定型形成割合は定型発達児より低いことが明らかにされた。また、形成過程においては、児の補償的な認知方略や、養育者の感性だけでなく洞察性や情緒的利用可能性（EA）といったASD児の特性やそれに基づく行動、および行動の背後にある原因についての養育者の理解と、児の特性に合った養育環境の構築に関わるコンピテンシーがアタッチメントの質を予測することなど、いくつかの特異性が見られることが明らかになった。一方で、従来の枠組みでは、「安全な避難所」や「安全基地」というアタッチメントの本来の機能に照らしてASD児のアタッチメントの本質を捉えることに限界がある可能性が今後の研究課題として見出された。

今後は、実証的な結果を報告してきた多数の先行研究からの知見を重んじながらも、もう一度Bowlbyの

アタッチメントの原義に立ち返り、ASD児の実際の姿から、丁寧にASD児のアタッチメントの機能や形成プロセスを問い直す必要がある。

7 引用文献

- Ainsworth Mary D.S., Blehar M., Waters E., Wall S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Baker Jason K., Messinger Daniel S., Lyons Kara K., Grantz Caroline J. (2010). A pilot study of maternal sensitivity in the context of emergent autism. *J. Autism Dev. Disord.*, **40**(8), 988-999. Springer.
- Baron-Cohen S. (2003). The essential difference パロン・コーエン「共感する脳、システム化する脳」, NHK出版.
- Biringen Zeynep., Derscheid Della., Vliegen Nicole., Closson Lia., Easterbrooks M. Ann Easterbrooks. (2014). Emotional availability (EA): Theoretical background, empirical research using the EA Scales, and clinical applications. *Developmental Review*, **34**(2), 114-167. Elsevier.
- Bowlby J. (1969). *Attachment and Loss: Vol.1, Attachment*. New York: Basic Books. (revised edition, 1982).
- Capps Lisa., Sigman Marian., Mundy Peter. (1994). Attachment security in children with autism. *Dev. Psychopathol.*, **6**(2), 249-261. Cambridge University Press.
- D.N.スターン・神庭靖子・訳 神庭重信. Anonymous (1989). 乳児の対人世界理論編. 東京: 岩崎学術出版社.
- Dawson Geraldine. (2008). Early behavioral intervention, brain plasticity, and the prevention of autism spectrum disorder. *Dev. Psychopathol.*, **20**(3), 775-803. Cambridge University Press.
- Dolev Smadar., Oppenheim David., Koren-Karie Nina., Yirmiya Nurit. (2009). Emotional availability in mother-child interaction: The case of children with autism spectrum disorders. *Parenting: Science and Practice*, **9**(3-4), 183-197. Taylor & Francis.
- Gul Hesna., Erol Nese., Pamir Akin Duygu., Ustun Gullu Belgin., Akcakin Melda., Alpas Başak., Öner Özgür. (2016). EMOTIONAL AVAILABILITY IN EARLY MOTHER-CHILD INTERACTIONS FOR CHILDREN WITH AUTISM SPECTRUM DISORDERS, OTHER PSYCHIATRIC DISORDERS, AND DEVELOPMENTAL DELAY. *Infant mental health journal*, **37**(2), 151-159. Wiley Online Library.
- John Aesha., Morris Amanda Sheffield., Halliburton Amy L. (2012). Looking beyond maternal sensitivity: Mother-child correlates of attachment security among children with intellectual disabilities in urban India. *J. Autism Dev. Disord.*, **42**(11), 2335-2345. Springer.
- Koren-Karie Nina., Oppenheim David., Dolev Smadar., Yirmiya Nurit. (2009). Mothers of securely attached children with autism spectrum disorder are more sensitive than mothers of insecurely attached children. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **50**(5), 643-650. Wiley Online Library.
- Marcu Inbal., Oppenheim David., Koren-Karie Nina., Dolev Smadar., Yirmiya Nurit. (2009). Attachment and symbolic play in preschool-

- ers with autism spectrum disorders. *J. Autism Dev. Disord.*, **39**(9), 1321-1328. Springer.
- Rogers Sally J., Ozonoff SALLY., MASLIN-COLE CHRISTINE. (1991). A Comparative Study of Attachment Behavior in Young Children with Autism or Other Psychiatric Disorders. *Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry*, **30**(3), 483-488. UNITED STATES: Elsevier Inc.
- Rogers Sally J., Ozonoff Sally., Maslin-Cole Christine. (1993). Developmental aspects of attachment behavior in young children with pervasive developmental disorders. *Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry*. **32**(6), 1274-1282. Elsevier.
- Rutgers Anna H., Bakermans-Kranenburg Marian J., Ijzendoorn Marinus H., Berckelaer-Onnes Ina A.. (2004). Autism and attachment: a meta-analytic review. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **45**(6), 1123-1134. Wiley Online Library.
- Rutgers Anna H., Van Ijzendoorn Marinus H., Bakermans-Kranenburg Marian J., Swinkels Sophie HN., Van Daalen Emma., Dietz Claudine., Naber Fabienne BA., Buitelaar Jan K., van Engeland Herman. (2007). Autism, attachment and parenting: A comparison of children with autism spectrum disorder, mental retardation, language disorder, and non-clinical children. *J. Abnorm. Child Psychol.*, **35**(5), 859-870. Springer.
- Sigman Marian., Mundy Peter. (1989). Social attachments in autistic children. *Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry*, **28**(1), 74-81. Elsevier.
- Van Ijzendoorn Marinus H., Rutgers Anna H., Bakermans-Kranenburg Marian J., Swinkels Sophie HN., Van Daalen Emma., Dietz Claudine., Naber Fabienne., Buitelaar Jan K., Van Engeland Herman. (2007). Parental sensitivity and attachment in children with autism spectrum disorder: Comparison with children with mental retardation, with language delays, and with typical development. *Child Dev.*, **78**(2), 597-608. Wiley Online Library.
- Willemsen-Swinkels Sophie HN., Bakermans-Kranenburg Marian J., Buitelaar Jan K., Van Ijzendoorn Marinus H., van Engeland Herman. (2000). Insecure and disorganised attachment in children with a pervasive developmental disorder: Relationship with social interaction and heart rate. *The Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, **41**(6), 759-767. Cambridge University Press.
- 伊藤英夫. (1994). 自閉症児の対人関係の発達—1—アタッチメントの発達. *特殊教育研究施設報告*, (43), p57-65. 東京学芸大学.
- 伊藤英夫. (2002). 自閉症児のアタッチメントの発達過程. *児童青年精神医学とその近接領域*, **43**(1), 1-18. 一社 日本児童青年精神医学会.
- 岩永竜一郎. (2013). 自閉症スペクトラム障害児の療育と支援. *Japanese Journal of Biological Psychiatry*, **24**(4). 252-256.
- 遠藤利彦. (2005). アタッチメント理論の基本的枠組み. 数井みゆき・遠藤利彦 (編著) アタッチメント生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房.
- 遠藤利彦. (2018). アタッチメントが拓く生涯発達. *発達*, **153**. 2-9.
- 遠藤利彦・田中亜希子. (2005). アタッチメントの個人差とそれを規定する諸要因. 数井みゆき・遠藤利彦 (編著) アタッチメント生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房.
- 片桐正敏. (2014). 自閉用スペクトラム障害の知覚・認知特性と代償能力. *特殊教育学研究*, **52**(2), 97-106.
- 高橋修. (2003). 乳幼児期の自閉症療育の基本. *そだちの科学*, 創刊1号. 27-33.
- 別府哲. (1994). 話し言葉をもたない自閉性障害幼児における特定の相手の形成の発達. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **42**. 156-166.
- 別府哲. (2007). 障害を持つ子どもにおけるアタッチメント—視覚障害, 聴覚障害, 肢体不自由, ダウン症, 自閉症. 数井みゆき・遠藤利彦 (編著) アタッチメントと臨床領域 ミネルヴァ書房.
- 柳澤亜希子. (2012). 自閉症スペクトラム障害児・者の家族が抱える問題と支援の方向性. *特殊教育学研究*, **50**(4), 403-411. 一般社団法人 日本特殊教育学会.
- 山口真美・仲渡江美. (2009). 顔理解の発達. 榊原洋一 (編著) アスペルガー症候群の子どもの発達理解と発達援助 ミネルヴァ書房.